

研究論文

人間関係の発達に伴い食行動のこだわりがみられた幼児

石井 宏祐* ・ 武藤 亜佐子**

A Case Study of a Kindergartner with Ups and Downs in Eclipsing
Eating with the Development of relationships.

Kosuke ISHII* and Asako MUTO**

【要約】

幼児Aは食行動のこだわりが強く、他児と同じものを同じように口にすることに大きな苦痛を伴うことから、母親は幼稚園入園後の人間関係を心配していた。しかし自由保育を方針とするB幼稚園に入園し、急速に人間関係を発達させていった。一方、入園前にみられた食のこだわりも維持された。人間関係の望ましい変化とこだわりの持続のバランスは、俯瞰してみると無理のない変化を支えている必要なバランスであることが考察された。

【キーワード】

幼児の人間関係の発達、食行動のこだわり、自由保育、家族療法、連携

1. 問題と目的

石井・石井・松本(2019)は「良い変化も疲れる」と述べ、「良い変化に伴う嘆きを話題に」し、「共感することが、良い変化を続ける援助になる」とした。しかしながら幼児においては、良い変化に伴う嘆きを話題にすることは現実的ではない。そのため、望ましい変化がみられた際、そこに幼児の疲れや嘆きを仮定し、他の懸念される行動の持続や悪化や浮き沈みについては、望ましい変化に伴って好転することを期待したり促したりせず、支援を続ける必要があると考えられる。またそのためには、「良循環に徹底的に関わる」(石井・石井・三谷・長谷川, 2005) 家族療法の視点が有用であると考えられる。そこで本研究では、強い偏食傾向によって人間関係の発達が心配された幼児が、こだわりを持続させながらも急速に人間関係を発達させていった事例に着目し、望ましい変化と懸念される行動の持続について、家族療法の視点から考察することを目的とする。

2. 事例

A児の様子 A児は入園前、人間関係よりも機械の仕組みなどパターン化された事象への関心が高く、電化製品と電源とのつながりや、稼働する設備の音、機器の種類やそれらの役割など、繰り返し話題にしたり確認したりすることが好きな幼児であった。その回数やリズムが満足なものでないときには、行動の切り替えが難しいこともあった。また、偏食傾向が強く、感覚の過敏さもあったことから、母親は3歳児での幼稚園入園後の生活を心配していた。

B幼稚園の方針 A児の保護者が選んだB幼稚園は自由保育を方針としており、また保護者も子供と登園し、子供の望みに応じて寄り添い、降園まで園で過ごすことができる園であった。入園前からA児のペースや自主性・自発性を大切にしてきた母親にとって、B幼稚園の教育方針は賛同できるものであった。時にA児のペース等を重んじる母親の方針が、他者から賛同を得にくく、孤立を感じることもあったとしても、園の方針がそれを和らげ

*佐賀大学教育学部附属教育実践総合センター

**佐賀大学教育学部附属幼稚園

る支えになったと考えられる。

B幼稚園では、入園後のA児への保育について、個別の配慮が必要と考え、園内カンファレンスで共通理解をはかり、環境（文部科学省，2018）を軸に支援方針を立てた。

①幼稚園で安心して過ごせるような環境作りを心がける。②行事等への参加は、その都度、保護者と相談し、参加や予告（方法・タイミング）の仕方を検討する。③個別の対応が必要な時も、クラスの一員として声のかけ方等配慮する。

以上の3点が、A児のペースを尊重し、予定の見通しをつきやすくし、様々な機会が提供される中で無理のない刺激を選択的に享受できることを目指して設定された。

支援者の連携 第1著者は、臨床心理学を専門とする大学教員であり、B幼稚園が実施している未就園児親子対象の発達相談の相談員として不定期で保護者支援を行っている。A児の母親は入園前に偏食を主訴として発達相談に訪れ、第1著者との関わりがあり、入園後も引き続き連携をとっている。家族療法をオリエンテーションにしている。

第2著者は、B幼稚園に保育発達支援員として勤務し、子ども達と遊びながら、保育上の配慮や支援を必要とする子ども達の発達のなアセスメントや支援を行っている。必要に応じて担任・副担任へのコンサルテーションや保護者相談を行い、園全体の保育・発達支援に携わっている。公認心理師資格を持つ臨床発達心理士であり、心理専門職としての支援が求められている。B幼稚園の教育目標は、「身近な環境に自らかかわり、遊びを創り出す力を育てる」である。幼児の自発的な遊びを通して成長や発達を遂げていけるような保育を行っている。第2著者も園の教育目標に則って、支援を必要とする園児の集団の中で自ら育つ力を大事に、日々の遊びや生活の中で支援を行っている。

母親はA児に付き添い、登園から降園まで園で毎日過ごしており、園児たちに親しまれ、職員とも良好な関係にある。

経過の概要 A児は、B幼稚園入園後、予想を超えたペースで幼稚園生活に慣れ、他児との関係を築いていった。一方、食行動の偏りに関しては、揺れ動きながら、変化の兆しが見え始めているところである。

強い偏食傾向は、当初人間関係の発達を抑制す

る要因として想定されたこともあった。しかし想定とは異なり、A児の人間関係の急速な発達という変化は、懸念される行動の望ましい変化の後に続くというプロセスではなかった。食行動へのこだわりは維持されながら、人間関係の急速な発達がみられた。

3. 方法

本事例では、母親と保育発達支援員（第2著者）と大学教員（第1著者）が連携しながらA児を支援する過程に焦点をおき事例を整理する。母親の語りと保育発達支援員の支援記録、大学教員の面接記録をもとに、入園してから現在までの人間関係の発達や強い偏食傾向の揺れ動きをまとめ、考察を加える。

4. 結果と考察

A児にとって、同年代の子ども達と過ごす集団の場は、初めての経験の連続で、とまどい、不安な気持ちを抱えながらの幼稚園生活の始まりだったと考えられる。

行事や特別な活動がある時は、A児が見通しを持てるよう、参加の仕方や事前の予告について母親と相談し、スムーズに参加することができていた。

入園以来、母親は幼稚園に残り、A児や年少組の子ども達に寄り添い、遊びを通して関わっている。母親がそばにすることで、A児は安心感を持って幼稚園で過ごすことができ、遊びも友だちとの関係も広がっている。

入園前から心配事として挙げられていた偏食については、友だちと一緒に弁当を食べる中で、おにぎりを食べてみたり、フォークを使ったりと、友だちの様子を見ながら同じようにしてみようという気持ちが芽生えているようであったが、おにぎりを全く食べなくなったり、手づかみで食べるようになったり、行きつ戻りつしている印象を受ける。しかし、他児に誘われ、自ら椅子やトレイを運ぶ姿や、友だちの隣で弁当を食べる表情からは、以前のような緊張は感じられなくなっている。

入園前には、食行動へのこだわりが人間関係の発達を抑制することが懸念されたが、むしろ人間関係の発達によって、食行動へのこだわりにも柔軟性がもたらされつつある様子がみてとれた。

表1 A児の変容プロセス

	遊びの様子・他児との関わり	食に関する行動
I期 (4~5月)	<p>《幼稚園の環境、人、遊びなどをじっくり観察し、友だちがしている遊びに興味を持ち、真似するようになる》</p> <ul style="list-style-type: none"> 人の多きにとまどっている様子で、保育室の外のテラスから中の様子を観察する。 歌やダンスが好きで、音楽が聴こえると興味を持って保育室に入る。外からでも担任の話をよく聞いている。 友だちのことや友だちがしている遊びをじっくりと観察し、保育発達支援員が遊んでいる場所(砂場で山作り・川工事・虫捕り・エビ捕り)では、友だちと同じようにする姿が見られる。 	<p>※ I期は午前保育だったため、園内では食に関する行動が特記される機会はなかった。</p>
II期 (6~7月)	<p>《気の合う友だちができ、友だちと一緒に水遊びや水鉄砲、ごっこ遊びなどを楽しむ》</p> <ul style="list-style-type: none"> 水遊びが始まり、水鉄砲で互いに水をかけ合い、全身びしょぬれになって遊ぶ。 トランポリンの順番待ちをしている時に、なかなか交替してくれない同じクラスのC児に「Cちゃん、かーわって」と保育発達支援員が言うと、A児も続けて言い始める。初めは「いやよ」と断られていたが、何回か言ううちに「いいよ」と替わってくれた。このことをきっかけにC児と仲良くなる。 C児の他にも数人、心許せる友だちができる。水遊びやおうちごっこ、虫捕り、すべり台と一緒に遊ぶ。 	<p>《お弁当が始まる。仲の良い友だちと一緒に机で食べる。他児の動きや様子をよく見ている》</p> <ul style="list-style-type: none"> 初日は、母親と一緒に弁当の準備をして担任の話を聞く。お弁当には手をつけない。 4日目ヨーグルト、シリアルを食べ始め、ミートソースうどんを食べようになる。 ミートソースうどんをフォークを使って食べ、おにぎり弁当の日におにぎりを完食する。(家では食べない) フォークで食べていたミートソースうどんを手づかみで食べるようになり、おにぎりを段々食べなくなる。(フォークについては、後日、母親から、A児が手づかみで食べようとしたときに「お友だちもフォークで食べてるよ。A児も食べてみようよ」と声をかけたら翌日から食べなくなったという話がある) 母親がお弁当を作っていると、「食べない」と言うので持って来ず、何も食べずに降園まで過ごす。(2回)
III期 (9~10月)	<p>《気の合う友だちと長い時間一緒に遊ぶようになる。遊びの種類が増え、同じクラスだけでなく年長児とも関わりを持つ。母親と離れて遊べる時間が増える》</p> <ul style="list-style-type: none"> よく遊んでいるジャンボすべり台や水遊びに加えて、ゆうき室で年長児の遊びを見た後に、ゲームボックスからジャンプ、跳び箱、太鼓橋などに挑戦するなど遊びの種類が増える。 友だち関係が広がり、あまり遊んだことのない友だちとおうちごっこやブランコ、虫捕りを楽しむ。 母親が育友会活動等でA児と一緒に遊べないときは、事前に話をしてくださり、納得して母親と離れられることができる。特に用事がなくても、母親が幼稚園にいれば離れて遊べる時間が増える。離れて欲しくない時には、その思いを母親に伝えることもできている。 保育研究会、小さい子が来る日など、見慣れない参観者が多い時は、友だちと遊ばずに、保健室、職員室に行きたいと言うことが増える。保育発達支援員の手や洋服を引っ張っていくほどである。保健室や職員室では、CDデッキやアンプを見て過ごす。 	<p>《母親がいない時には保健室で食べるようになる》</p> <ul style="list-style-type: none"> 9月中は母親と一緒に保育室で食べるが多かった。 母親がそばにいない時は、「保健室で食べたい」と言うことが多くなる。 保健室では好きなCDデッキを近くに置いて食べるが多い。 ミートソースうどんを手づかみで食べている時、他児から「なんで手で食べてるの?」と聞かれることがある。「手で食べたいから」ときっぱりと答える。 10月に入り、おにぎり・パン弁当の日2回続けてふりかけしか食べない。担任・副担任と相談してミートソースうどんを持ってきて頂くよう担任から母親に伝えてもらう。 後日、母親がA児に伝えようと思っていた時に、A児がカレンダーを見ながら「明日はおにぎり・パンの日なの?」と泣きながら聞いたという話がある。
IV期 (11~12月)	<p>《同じクラスの友だちと色々な場所で母親と離れて遊ぶ。ごっこ遊びのバリエーションが増え、お客さんや赤ちゃんになり、友だちとのやりとりが増える。年長児や年中児とも関わりを持つ。母親や保育発達支援員がそばにいないとも子ども達だけで遊べるようになる》</p> <ul style="list-style-type: none"> 数人の年長児がしている電車ごっこ・温泉ごっこの仲間に入り、一緒に遊ぶ。 落ち葉を集めた落ち葉場で、落ち葉を友だちとかけ合って遊ぶ。 友だちと一緒に、三輪車に乗って出かけたり、タイヤブランコを二人乗りして遊ぶ。 数人でのかくれんぼを楽しむ。 午後の片づけの時、仲の良い2人が運んでいるそりに手を添えて一緒に運ぶ。 母親がいなくても帰りの会に参加し、身支度を自分で整える。登園時のシール貼り、朝の支度を久しぶりにする。以後は毎日するようになる。 	<p>《食行動のバリエーションが増える》</p> <ul style="list-style-type: none"> 今まで一緒に食べていた友だちが他児と食べるようになり、他の友だちや一人(母親と)で食べるようになる。 入園願書提出後、しばらく職員室は入室禁止となる。母親が事前に話をしていたそうで、職員室・保健室方面に近付かなくなる。母親と保育室で食べるが緊張が高い。食事中、他児の動きや母親の動きを目で追う様子が見られる。 職員室に入れない時、見たいものや借りたいものがある時は先生に伝えてねと話をする、「コンボが見たい」と言い、保健室でCDデッキを見ながら食べる。 火災避難訓練の日(初参加)、母親が家で予告していたが不安そうに登園。訓練はスムーズに参加する。母親には保育室で食べると言っていたが、D児に誘われ、D児と保育発達支援員と保健室で食べる。 久しぶりに左手にフォークを持って食べる。 お弁当の片づけを自分でしようとする。

人間関係と食行動の変遷 表1は保育発達支援員（第2著者）の支援記録をもとに、A児の遊びや他児との関わり及び食に関する行動の様子をまとめたものである。

I期は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のために休園時期が長く、4月にA児が登園したのは、体験入園に位置づけられる4日間のみで、5月は中旬以降になってからの登園であった。新しい幼稚園の環境や他者、遊びなどをじっくり観察し、友だちがしている遊びに興味を持ち、真似をしてみる様子がみられた時期である。関心のある物や現象だけでなく、他者にも関心を寄せる力があることが明らかになり、A児のリソースと考えられた。

II期は、気の合う友だちができ、一緒に遊びを楽しむことができるようになる時期である。入園前は他児と遊ぶことに非常に慎重であったA児が、入園後間もない時期に他児と楽しく遊ぶ姿からは、母親が寄り添い、自由な方針のB幼稚園が、新奇場면을探索する安全な環境になっていることが示唆された。

またII期には、弁当が始まった。A児は限定されたわずかなメニューしか食べないが、弁当ではそれ以外のメニューに否応なく接する機会が増える。初めは新奇のメニューを食べることに挑戦することもあったが、周囲に合わせている様子がみられ、ストレスがたまる時期だったと考えられる。人間関係における探索が安定して続くのに反して、食行動の探索には無理があり続かなかったと考えられる。

III期では、気の合う友だちと長時間、幅広い遊びを楽しめるようになった。母親とも離れて遊ぶことができるようになってきた。一方、不安なときには適切に母親を求めたり、安心できる機器の側で過ごせるよう求めたりすることもできた。A児のペースでA児が育ち、A児のペースを母親や保育発達支援員が尊重する相互作用によって、A児が人間関係を発達させていくプロセスが示唆された。

一方でIII期には、食行動の探索の沈静化がみられた。偏食傾向と食べ方のこだわりなどが目立ち、探索が抑えられた時期であった。

IV期は、気の合う友だちに限らず、他の園児と

も遊べるようになってきた。身の回りのものの始末や片付けなど、園生活の流れに沿った活動を自ら進んで行うようになってきている。母親や保育発達支援員や気の合う友だちと作る空間の一員というよりも、B幼稚園の一員としてふるまうことが次第に増えてきているところである。

またIV期には、III期にみられた沈静化がほどかれ、II期の初めにみられた食行動の探索が再びみられるようになってきている。しかしII期の探索は周囲に無理に合わせた様子であったが、IV期ではこだわりが人間関係によって干渉されているような、肯定的な意味合いが示唆されるものであった。

食行動以外のこだわりの意味合いの変遷 A児は入園前から、機械の仕組みなどパターン化された事象への関心が高く、電化製品と電源とのつながりや、稼働する設備の音、機器の種類やそれらの役割など、見たり聞いたり確認したりすることが非常に好きであった。この時間は、楽しく過ごすことができ、時に離れがたく次の行動への切り替えに強いストレスを感じることもあるとしても、A児の遊びでありストレスコーピングであり切り替えに必要な儀式的行動であると考えられる。

A児のペースや自主性・自発性を大切にしてきた母親と、自由保育を方針とするB幼稚園は、A児の多様な意味合いを有するこだわりに寄り添い続けてきた。

初めのうちこだわりの多様な意味合いは未分化で、日常に広く浸透している行動であった。しかし次第にこだわりは、登園の間は遊びとして分化されていき、降園後は登園の疲れを癒す儀式のような役割を担うストレスコーピングとして分化されていくようであった。これらの意味合いは完全に独立したものではありえず、降園後の楽しい遊びであることも、あるいは登園中のストレスコーピングであることもあるが、日常の中で構造化されて位置づけられるようになってきたと考えられる。

こだわりの意味合いの変遷もまた、人間関係の発達と同様に、A児の発達を感じさせるものであった。

5. 総合考察

入園後A児は他児への関心も高く、特定の他児との遊びからはじまり、その場その時に応じた他児との遊びを通して、入園後半年で急速に人間関係を発達させていった。一方、入園前からみられたパターン化された事象への関心は維持されたが、その対象への没頭への意味合いには分化している様子がみられた。また、強い偏食傾向も維持されたが、抵抗ある食材に対する拒絶の強さには波がみられた。人間関係の発達という望ましい変化は、食行動の改善をも期待させたが、期待に反してこだわりが強まることもあり、人間関係の発達と食行動の改善は相乗的に促進し合うものではなかった。しかし相乗効果が見込まれないことは否定的なことというよりはむしろ肯定的に捉えることができると考えられる。すなわち、望ましい変化とこだわりの波のバランスは、俯瞰してみると無理のない変化を支えている必要なバランスであることが考察された。

望ましい変化を支えるための援助として「良い変化に伴う嘆きを話題に」(石井・石井・松本, 2019) することは、幼児を対象とする場合は難しい。その代わりに、幼児の疲れや嘆きを仮定し、他の懸念される行動の持続や悪化や浮き沈みについては、望ましい変化との無理のないバランスとして必要なことと捉えることが有効なのではないだろうか。

望ましい変化が起こると、望ましい変化に伴って、その他の懸念も好転することを期待したり促したりしてしまうものだと考えられる。しかし望ましい変化が起こるときとは、その他の望ましい変化や、その他の望ましくない変化や、その他の現状維持など様々なことが起こっているものである。家族療法の視点に立つと、望ましい変化が維持されることを目指すことになる。望ましい変化に伴って、その他の懸念も好転することを期待したり促したりしてしまうと、「良循環に徹底的に関わる」(石井・石井・三谷・長谷川, 2005) ことが難しくなってしまう、支援の想いに反して悪循環に陥ってしまうおそれがあると考えられる。

A児はIV期で、人間関係の発達と、食行動へのこだわりの望ましい変化がともにみられる時期を迎

えつつある。しかしここでも両者の相乗効果を徒に期待するのではなく、浮き沈みが今後も起こりうることを念頭におきつつ、これまでどおりA児のペースを尊重した関わりを維持することが肝要だと考えられる。

文献

- 1) 石井宏祐・石井佳世・三谷聖也・長谷川啓三 (2005). インタラクショナル・ビュウを臨床に活かす—短期家族療法のユニークな視点. 長谷川啓三(編)現代のエスプリ 456 臨床の語用論 II. 至文堂.
- 2) 石井宏祐・石井佳世・松本宏明 (2019). カウンセリングの理論と方法. 長谷川啓三・佐藤宏平・花田里欧子 (編) 事例で学ぶ生徒指導・進路指導・教育相談 中学校・高等学校編. 遠見書房.
- 3) 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説. フレーベル館.

付記

研究に協力いただいたA児のお母様に心より御礼申し上げます。

